秋田大学医学部保健学科

後援会だより

No.22　平成24年４月

目　　次

卒業式　式辞　東日本大震災の翌年に巣立つ皆様へ　保健学科長　浅沼　義博…… 3
祝辞　後援会会長　佐々木敏昭…… 4
祝賀会　謝辞　理学療法学専攻４年次　瀬戸　新…… 5
東日本大震災に関連して　保健学科長　浅沼　義博…… 7
新年度に向けて　作業療法学専攻　教授　大友　和夫…… 9
看護学専攻の動向　看護学専攻主任　平元　泉…… 10
理学療法学専攻の動向　理学療法学専攻主任　進藤　伸一…… 12
学生，その選択の時代　作業療法学専攻主任　石井　良和…… 13
看護学専攻の臨地実習について　看護学専攻実習委員　米山奈奈子…… 14
理学療法学専攻の臨床実習について　理学療法学専攻　佐竹　將宏…… 15
作業療法学専攻６期生の総合臨床実習を終えて　作業療法学専攻　津軽谷　恵…… 16
平成23年度保健学科教育賞を受賞して　作業療法学専攻　石川　隆志…… 17
平成23年度保健学科教育賞を受賞して　看護学専攻　杉山　令子…… 18

学生からのメッセージ

・１年間を振り返って　看護学専攻１年次　山田　菜月…… 19
・３年間を振り返って　看護学専攻３年次　高橋　道子…… 20
・初年次を振り返って　理学療法学専攻１年次　鎌田　凌介…… 21
・必要とされる理学療法士を目指して　理学療法学専攻４年次　鈴木　華子…… 22
・一年間を振り返って　作業療法学専攻１年次　長谷山知奈未 …… 23
・４年間を振り返って　作業療法学専攻４年次　加賀美　開…… 24
・陸上部員であること　看護学専攻１年次　川上　森也…… 25

サークル活動

・学びの想いによせて
秋田スポーツメディカルコンディショニング研究会代表　理学療法学専攻３年次　加賀屋勇気 …… 26
・園芸から学んだこと　園芸農業クラブsaryo代表　作業療法学専攻３年次　村田　航也 …… 27

・私たちの憩いの場　区画活性課代表　作業療法学専攻３年次　小阪　翔子…… 28
・釣りサークルの活動　釣りサークル代表　理学療法学専攻３年次　松浦　一輝…… 29
・スポーツ研究サークル　理学療法学専攻３年次　瀬川　槙哉…… 30
・旅サークルの活動　理学療法学専攻３年次　松浦　一輝…… 31
・刺激し刺激され合う場　エンジョイリハ！代表　理学療法学専攻２年次　青山　祐…… 32
・ダンスという活動を通じて　理学療法学専攻１年次　鎌田　凌介…… 33
・学務委員会活動の平成23年度を振り返って　学務委員長　兒玉　英也…… 34
・平成23年度入学試験について　入試委員長　水沼　秀夫…… 35
・平成23年度FD講演会について　FD委員会委員長　浅沼　義博…… 36
・放浪癖　－思い出の山旅，その３薬師岳－　理学療法学専攻　岡田　恭司…… 37

新任教員紹介

・保健学専攻　母子看護学講座　小児看護学分野　大高麻衣子　…… 40
・保健学専攻　地域・老年看護学講座　地域看護学分野　藤田　智恵　…… 40

平成23年度秋田大学医学部保健学科入学試験実施状況　…… 41
平成23年度日本学生支援機構奨学生数　…… 41
平成23年度卒業生進路状況　…… 41
平成23年度後援会決算書　…… 42
平成24年度後援会予算書　…… 43
平成24年度後援会役員・総代名簿　…… 44
大学の行事等（平成23年４月～平成24年３月）…… 45
後援会会則　…… 46

卒業式　式辞
東日本大震災の翌年に巣立つ皆様へ

保健学科長
浅　沼　義　博

保健学科６期生118名の皆様，大学院博士前期課程４期生12名の皆様，博士後期課程１期生３名の皆様，そしてご家族の皆様，本日はご卒業おめでとうございます。

さて，昨年３月11日に発生した東日本大震災から早や１年が経ちました。いまだに多くの方が行方不明であり，復旧・復興も順調に進んでいるとは言えません。この様な困難な時に社会に巣立っていく皆様には，天から然るべく使命が与えられていると思います。それは何でしょうか。

秋田大学としては，国の方針に基づいて授業料免除等の支援を行っております。また我々教職員一人ひとりが，日本看護協会，日本理学療法士会，日本作業療法士会の支援事業に参画したり，寄附等の支援を行っております。医学部保健学科としても，国立大学協会と連携して「仮設住宅利用者の心身の健康をサポートする人材養成支援」プロジェクトを行なっており，これまで19回，延べ31人の教員が被災地に入っております。では，先ほど言及した卒業生の皆様の使命とは何でしょうか。それは，国家資格を持つ看護師，保健師，助産師，理学療法士，作業療法士として社会に出て，まず目の前の患者さんや障害を持つ人を救うことだと私は考えます。今，助けを求めている人は世界中におられますが，皆様にはまず数年間は自分の修業時代であると考え，より強い使命感と向上心を持って，医療の現場で自分の技術と心と知識を磨いて欲しいと思います。

では，これから皆様が働く社会というのはどのような社会でしょうか。それは，人の命を預かる職場であり，かつ「医療崩壊」という言葉に象徴される大変厳しい世界です。その１つの例ですが，新卒看護師の入職後１年以内の離職率は全国平均で約10%です。つまり10人に１人は，１年以内に看護師をやめています。その理由は“リアリティショック”と説明されており，３つの大きな要因があります。

①医療事故を起こしてはいけないというプレッシャーがある。
②死にゆく患者さんへの対応が難しい。
③重症患者や急変患者への適切な対応が難しい。

これら３つは，人の命を守るという職業ゆえに生ずる根源的な問題であり，新人でなくとも皆悩んでいるのです。新人はそれをより強く悩むということです。では，この解決困難なリアリティショックの問題に対して，我々はどの様に考え，どの様に対応すればよいのでしょうか。

皆様は柳田邦男という作家をご存じですね。「犠牲（サクリファイス）－わが息子・脳死の11日」，「がん回廊の朝」などを書いた優れたノンフィクション作家です。実は柳田氏は５年ほど前に秋田大学病院の看護部にきて下さり，２時間半の特別講演をされました。その講演が終わった後の質疑応答で，ある看護師が次の様な質問をしました。「柳田先生は，いつも生と死という重いテーマを扱っておられるのに，何故壊れないでいつも強く生

きていられるのですか？」。その答えは，以下の如くでした；柳田氏は小学校５年生の時にお父様を亡くし，お母様が栃木県内の小学校の先生をしながら５人の子供を育てられた。そのお母様がいつも言っていた言葉がある。それは，「しかたなかんべさ」，「なんとかなるべさ」，「たいしたもんだ」の３つの言葉です。
「しかたなかんべさ」：やむをえない現実を直視し，受け入れる。
「なんとかなるべさ」：希望を失わず前に進む。
「たいしたもんだ」：自分を認めて，自分を大切にする。

この３つの言葉が柳田氏の性格に強く染みついていて，自分を支えてくれているというお答えでした。私はこの講演に大変感銘を受けました。皆様には，これから困難に直面した時，「しかたなかんべさ」，「なんとかなるべさ」，「たいしたもんだ」の３つの言葉を思い出して下さい。そして命を守るというすばらしい仕事をどうぞやめないで下さい。

さて，大学院を修了された15名の皆様，おめでとう。特に，博士号については，秋田県内の保健学系大学院として初めて誕生させた学位であり，極めて意義深いものです。修士号や博士号を取ったからといって，明日からすぐに給料が上がるとか職位が上がるとかいう訳ではないのですが，将来必ず待遇や職位に反映されるはずです。そして，それより大切なことは，大学院で皆様が積み重ねた努力や流した涙は，皆様の自信につながり，それが財産となって必ずこれからの人生に役に立つということです。大学院修了生には，ゲーテの次の言葉を贈ります。
「Ohne Hast, aber ohne Rast」：急がない，しかし休まない。

皆様は，全国の看護職130万人，理学療法士７万人，作業療法士５万７千人のリーダになる人です。その自覚と誇りを持っていただきたいが，そこには当然責任と義務を伴います。それを果たすためには，急がない，しかし休まないで努力し続けるという姿勢を，自分の人生の態度として持ち続けて下さい。

今日，外は強い風が吹いています。昔から，この様な春の風を，「青葉風」とか「緑風」と言います。若々しく，香しく，しなやかで，力強くこの世を再生し未来を切り開いてくれる風です。まさに，皆様のことであります。皆様のご活躍を，心より祈っております。

最後に，この良き日に，ご多用中にもかかわらずご出席いただいたご来賓の方々に心から御礼を申し上げ，私の式辞と致します。

本日は，誠におめでとうございました。

祝　辞

後援会会長
佐々木　敏　昭

保健学科卒業生の皆さん，大学院保健学専攻修了生の皆さん，本日はご卒業おめでとうございます。ご列席の保護者並びにご家族の皆さまに心からお祝い申し上げます。また，今日まで卒業生および修了生をご指導して頂きました浅沼学科長はじめ教職員の皆さま

に，後援会を代表してお礼を申し上げます。

卒業生，修了生の皆さんは，これから社会人として働く方，あるいは学業をさらに続ける方それぞれが，新しいチャレンジに向けて決意を新たにされていることと思います。

昨年は，３月11日に東日本大震災があり，地震と津波，原発事故なども加わり，自然の猛威と人災を実感した大変な年でありました。一年余りが過ぎた現在も多くの被災者の方々が，仮設住宅などで不自由な生活を余儀なくされております。一日も早く元の生活に戻れるよう被災地の復旧，復興を願っております。

さて，人口減少や急速な少子高齢化の進行などを迎えている今こそ，医療機関や介護機関等で人々の健康に携わる看護師，保健師，助産師，理学療法士，作業療法士の皆さんは，高度な医療技術に対応できるだけでなく，多様な価値観を持つ人々のニーズに合った安全なケアの提供と高い倫理性とが求められております。

皆さんは，入学以来，不断の努力をもって勉学に勤しみ，看護に必要な幅広い知識と技術を習得することにより，生命の尊重と人間愛のある医療人をめざしてこられたことと思います。今後は,その知識と技術を生かして,人の命や心を救うという仕事の尊さと理想を忘れずにがんばってください。

相田みつを氏の言葉に,「感動が人間を動かし，出会いが人間を変えてゆく。」とあります。皆さんは，今日までの大学生活の思い出を胸に，明日からはそれぞれの道を歩むことになります。是非，すばらしい人と出会って，いろんな感動を体験して，自他共に心豊かな社会の実現に貢献されますよう期待しております。

最後になりますが，卒業生，修了生の皆さんのご健康とご多幸，そして輝かしい未来をご祈念いたしまして，お祝いの言葉といたします。

祝賀会　謝辞

理学療法学専攻４年次
瀬　戸　　新

本日は私たち卒業生のためにこのような盛大な会を催していただき誠にありがとうございます。学科長の浅沼先生をはじめ，ご多用にもかかわらず御臨席下さった御来賓の皆様方，保護者の皆様方から多くの温かいお言葉を頂戴し，卒業生一同，喜びと感謝の気持ちでいっぱいです。

東日本大震災から早くも１年が経ちました。被災地では多くの方が今も不自由な生活を送っています。秋田県も数日間の停電に見舞われるなど，震災の影響を受けました。その後も余震に怯え，眠れない夜もあり，不安な日々を過ごしました。そのような中でも，無事に１年を過ごすことができたのは，私の周りの多くの方が私を支え，励ましてくれたからだと思います。昨年は卒業式も行うことができず，謝辞を読むこともできなかったと聞いています。しかし，今年こうして無事卒

業式を行うことができ，ここでこうして謝辞を読むことができていることをとてもうれしく思うとともに，皆様には本当に感謝しております。

４年間の大学生活を思い返してみますと，多くの仲間や先生方，私たちを支えて下さった方々と過ごした一瞬一瞬がとても大切な思い出として残っています。日々の勉学や試験，実習に追われながらも仲間たちと協力し合い必死に自分の目標に向かって走り続けた日々，生活費や自分のしたいことのためにアルバイトに励んだ日々，専攻や学科の枠を超え，仲間とともに同じ目標に向かって切磋琢磨した部活動の日々，仲間たちと朝まで語り合い，バカをした日々など，たくさんの思い出があります。中には苦しい思い出や辛い思い出もありますが，今となってはそれも大切な思い出であり，私たちを大きく成長させてくれたのだと思っています。いろいろなことを経験しながらもこうして無事に今日の卒業という日を迎えることが出来たのは，私たちを支えてくれた先生方や職員の方々，家族の方々，そして大切な仲間たちがいてくれたからだと実感しております。本当に感謝しています。

はじめに，４年間私たちを温かく見守って下さり，時に厳しく，時に優しく指導して下さった先生方，本当にありがとうございました。先生方からは，医療従事者として働いていくうえで必要となる知識や技術を学ばせていただいただけでなく，人と人との関わり合いとはどういうことなのかというような精神面についての多くのことも学ばせていただくことが出来ました。また，人生の先輩として辛いことや恋愛についてなどの相談にも乗っていただきました。先生方から学んだこと全てを活かし，これから一人でも多くの方を笑顔にしてゆけるよう頑張っていきたいと思っています。

次に，私たちの大学生活を様々な面から支えて下さった大学職員の方々，本当にありがとうございました。学務課の方々をはじめ，生協スタッフの方々，図書館職員の方々，学内清掃員の方々などとても多くの方が私たちの大学生活を支援して下さいました。それによって私たちは快適で安心できる学生生活を送ることが出来，勉学に集中することが出来たのだと思います。本当に感謝しています。

そして，この４年間だけでなく，今までずっと私たちを支え続けてきてくれた両親・家族の方々，長い間本当にありがとうございました。私は地元長野県を離れ，ここ秋田で大学生活を送りましたが，家族には苦労や心配をたくさんかけてしまったと思います。それでもただひたすらに私を支え続けてくれたことで，経済的にも精神的にもとても救われ，諦めることなく４年間の勉学にはげむことが出来たのだと思います。久しぶりに実家へ戻った時に母親が作ってくれたお味噌汁の美味しさは何よりも私の心を潤してくれました。私のように実家を離れた者やそうでない者も皆，卒業生一人ひとりがご家族に対する感謝の気持ちを実感していることと思います。これからは社会人として自立し，活躍している姿を見てもらうことで少しでも安心してもらい，少しずつでも親孝行して，恩返ししてゆけるように頑張っていきたいと思います。

私は学部生でありますが，本日は大学院の第4期生として卒業される方々もこの場におられます。中にはお世話になった先輩もおられ，その方が忙しそうに勉学に励む姿はとても自分にとって刺激になりました。仲間にも院へ進学する者がおり，頑張ってほしいという気持ちとともに卒業後の選択肢の広がりを感じています。夜間開講制という就学体系によって臨床経験を積みながらも高度な勉学に

はげむことが出来る機会を得られるのは，魅力的なことだと思います。そして大学院卒業生の方々も私たち学部生同様に多くの方々に対して感謝の気持ちを持っておられることと思います。この場をお借りして，大学院卒業生に代わり，皆様に感謝申し上げます。

私は，地元長野県ではなくここ秋田県に就職することが決まりました。４年間学生として過ごした秋田県ですが，ただ遠いだけの土地がいつの間にか大好きな土地に変わり，まだまだやり残したことやこれからやってみたい事も多く出来ました。そのような土地でこれからも生活できることはとてもうれしく，希望に満ち溢れています。家族にはまだまだ心配や迷惑をかけてしまいますが，少しずつ独り立ちしていけるように努力し，秋田県の医療の発展や地域社会の発展に貢献していけるように精進していきたいと考えております。本日の卒業をもって卒業生一人ひとりが新たな一歩を踏み出します。地元に戻る者や秋田に残る者など様々で，進む道はそれぞれ異なりますが，ともに過ごしたこの日々を糧にして，秋田大学卒業生の名に恥じぬよう，日々精進し，感謝の気持ちを忘れず，謙虚な姿勢でそれぞれの人生を力強く歩んでいきたいと思います。そしてたまにはみんなで集まって，またいろいろな話をしたいと思います。そのような日が来ることを心から楽しみにしています。

最後になりますが，秋田大学医学部保健学科のますますのご発展と教員・職員の皆様のご健勝とご多幸をお祈りいたしまして卒業生代表の謝辞とさせていただきます。

４年間本当にありがとうございました。

東日本大震災に関連して

保健学科長
浅　沼　義　博

陽春の候、後援会の皆様には、いかがお過ごしでしょうか。本年も後援会だよりをお届けする季節になりました。医学部保健学科の現状を報告するとともに、東日本大震災に関連したことならびに医学部創立40周年記念事業についてご報告させていただきます。

まず平成23年度の学生数は、４年次については、看護学専攻81名、理学療法学専攻20名、作業療法学専攻19名で計120名、３年次については、看護学専攻79名、理学療法学専攻18名、作業療法学専攻19名で計116名、２年次については、看護学専攻69名、理学療法学専攻19名、作業療法学専攻20名で計108名、１年次については、看護学専攻74名、理学療法学専攻18名、作業療法学専攻19名で計111名です。従って、合わせると、看護学専攻303名、理学療法学専攻75名、作業療法学専攻77名で合計455名になります。

平成23年２月に行われ、本学５期生が受験した国家試験の合格率は、看護師98.6％（71/72）、理学療法士90.9％（20/22）、作業療法士100％（20/20）でした。いずれも全国平均を大きく凌駕し、概ね満足すべき結果でした。特に作業療法士においては、全国平均が

71％と低値であるにもかかわらず100％を達成したのは快挙でした。

教員数は、看護学専攻では教授10名、准教授５名、講師５名、助教13名の計33名、理学療法学専攻では教授４名、准教授２名、助教３名の計９名､作業療法学専攻では教授４名、准教授２名、助教３名の計９名であり合計51名です。大学院につきましては、平成21年４月に新たに博士後期課程を開設し、４名の一期生を迎えることができました。そして平成23年度に、晴れて３名の博士（保健学）が誕生したことは、本学のみならず秋田県にとっても特筆されるべき業績と考えています。

さて、平成23年は、わが国が千年に1度ともいわれる東日本大震災に見舞われた年でした。私共保健学科では、実家が被災した学生は16名でした。家屋は全壊５名、半壊６名でしたが、ご両親・ご兄弟とも高台に避難でき、学生本人も含めて全員が無事だったことは不幸中の幸いでした。秋田大学としては、国の方針に基づいて被災された学生への授業料免除等の支援を行っております。また教職員一人ひとりが、日本看護協会、日本理学療法士会、日本作業療法士会等の事業に参画したり、ボランティアとして被災地に入ったり、衣類やお金を寄附したり等々、様々な形で被災者支援を行っております。医学部保健学科としても、自分達の技術を生かした形の支援をしたいという教職員全員の意志の下に、一般社団法人国立大学協会が公募した平成23年度震災復興・日本再生支援事業に応募し、無事採択されました。私共の事業名は「仮設住宅利用者の心身の健康をサポートする人材養成支援」であり、内容は、1）仮設住宅の住民等を対象とした健康教室・健康相談会を定期的に実施する、2）住民を対象としたボランティア養成講座を実施する､というものです。佐々木久長先生、煙山晶子先生、猪股祥子先生などが中心となって、被災地のニーズを把握することから始めたこの事業では、本橋豊医学部長の力強いご支援もいただき､これまで（平成23年10月～平成24年２月の５ヶ月間で)、22回、延べ36人の教員が岩手県釜石市や大槌町等を訪れ、復興支援に尽力してきました。その模様は、保健学科玄関に掲示してありますので､何かの折にご覧ください。被災地の方々からは、平成24年度もこの事業を是非続けて欲しいとの要望が寄せられています。保健学科としても、教職員一同が団結して末長く震災復興に携わっていく所存です。そのために、平成24年度もこの国立大学協会の事業を継続すべく、これまでの支援内容をより発展させたプロジェクトを立案し応募した所です。

最後に、医学部創立40周年記念募金事業について御礼かたがたご報告申し上げます。昨年の後援会だよりでも触れさせていただきましたが、秋田大学医学部創立40周年記念事業として、記念会館の建設や記念誌編纂、記念式典など多くの事業が計画されました｡特に、40周年記念会館の建設は、秋田大学医学部で学んだ者にとって大きな夢でした。募金活動は平成22年７月より開始されましたが、リーマンショック後の経済不況が続くなかで、また東日本大震災という苦境のなかで２億円を達成できるかどうか不安もありました。しかし秋田大学医学部に関係する多くの方々のご厚意に支えられ無事目標額を達成することができました。保健学科としては、同窓会「本道さくらの会」から多額のご寄附をいただきました。また、保健学科後援会前会長 波多野善明様と現会長 佐々木敏昭様には事業遂行のための運営委員会副会長をお引き受けいただき、そして後援会の皆様にご寄付をお願いしたところ、たくさんの方から御厚志を頂戴することができました。私も、事業部会副部会長としてうれしいということ以上に、保

健学科長として大変心強く感じました。今後は、記念会館の建設が始まります。建設予定地は保健学科棟南側駐車場であり、２階建てで、200席程度の大ホールと60席程度の研修セミナー室を含み、平成25年３月竣工予定です。保健学科として、新しい時代に即応した教育・研究の発展のために大いに活用していく所存です。ここに後援会の皆様のご尽力に対し、重ねて御礼申し上げます。ありがとうございました。

新年度に向けて

作業療法学専攻教授
大　友　和　夫

平成24年度から学科長・専攻長をお引き受けすることになりました。よろしくお願い致します。

この一年は，東日本大震災により，卒業式，入学式は中止になり，入学試験も停電，そして頻繁に起こる余震の中での実施など様々な影響を受けました。そんな中，保健学科は10年の節目の年を迎え，大学院博士後期課程も完成年度を迎え，より充実した保健学科・大学院医学系研究科保険学専攻になりました。24年度は，次の10年のスタートの年として，これまで築き上げられた業績と伝統を継承しながら，本学のさらなる発展と充実のために踏み出したいと考えております。そのため第一に，理念・目標の着実な実現を目指すことが重要と考えております。本学の学生は，言うまでもなく医療技術従事者を目指しているわけですので，技術的スキルの向上はもとより，より豊かな教養と倫理観を備えることも必要です。そのために一年次で教養基礎教育を履修します。教養基礎教育では，初めに，仲間とのコミュニケーションを生かしながら大学での学修方法や生活指針を学ぶための初年次ゼミを履修し，視野を広げ，個性を伸すために幾つかの主題別科目を学び，国際的視野を広げるための基礎となる国際言語分野を学び，さらに，専門分野の基礎知識となる基礎教育科目を学びます。本学はキャンパスが２つに分かれているために必ずしも希望する科目を自由に学ぶ環境に無い部分もありますが，カリキュラムを工夫することで，より充実した教養が身につくように考えられております。学年が進むにつれて多くの専門分野を学ぶことになりますが，数年前に完成したバリヤフリー体験コースやこの３月に完成したシュミレーションセンターなどを利用したより実践的な専門教育を受けられるように考えたいと思っております。

震災をきっかけに，社会貢献の重要性も取り上げられ，多くの人々がいろいろな場面に参加しておりますが，本学でも一般社団法人国立大学協会の「災害復興・日本再生支援事業」による釜石市への支援を初め，様々な形で社会貢献活動を行っております。学生諸君にも長期休日などを利用し積極的に参加することを勧め，その評価体制についても検討していきたいと思っております。

いろいろ述べて参りましたが，学生の最終

目標である国家試験の合格に向けて，より効果的な支援体制についても重要事項として考えていきたいと思っております。

今後も皆様方から様々な形でご支援をいただかなければならない場面があると思いますので，よろしくお願い致します。

看護学専攻の動向

看護学専攻主任
平　元　　泉

看護学専攻の動向をご紹介します。未曾有の東日本大震災の翌日に，23年度後期日程の入学試験が実施されました。震災後に停電したまま一夜を過ごし，何が起こっているのか何の情報もない状態でした。遠方の受験生は前日に秋田入りしていたためか，大幅な遅刻もなく，無事に試験を終了することができました。しかし，試験終了後は交通手段がなく，帰宅するまで大変な苦労をされた受験生もいたとのことでした。無事に終了できたことは何よりでした。

医学部保健学科看護学専攻第５期生および大学院修了生は，３月23日の卒業式や祝賀会が中止となりました。簡素な服装でしたが，ビューホテルにおいて卒業証書伝達式および大学院生の学位授与式が開催され，平成22年度の卒業生･修了生を送ることができました。震災の復興に向けて，医療関係者の役割に対する責任は重く，巣立ちに際して新たな決意を，卒業生の皆さんの表情から感じることができました。大学院博士前期課程の修士（看護学）を取得した修了生は９名でした。看護学専攻の卒業生82名の進路状況は，就職79名，進学１名，その他２名でした。就職の内訳は，看護師68名（県内37名・県外31名），保健師７名（県内３名･県外４名），助産師４名（県外）でした。秋田大学医学部附属病院には31名が採用されました。１期生は就職５年目となり，臨地実習指導者として活動している人もいます。関東方面へ就職した卒業生が秋田県内の病院等にＡターンしている例もあり，秋田県内各地で今後の活躍が期待されるところです。保健師としての就職は昨年の５名より若干増えましたが，依然として厳しい状況にあります。国家試験の新卒者の合格率は，看護師98.6%（全国平均96.4%），保健師97.5%（同89.7%），助産師100%（98.2%）と，いずれも全国平均を上回っていました。

新入生第８期生80名（編入生10名を含む）は，震災の影響で入学式は中止になり，１週間遅れて４月12日に新入生ガイダンスが開催され，全員が元気にスタートラインに立つことができました。入学後には，クラスメイトや教員との交流を目的に，例年はホテルでの会食を兼ねた新入生オリエンテーションを開催していました。今年度は「自分の気持ちをふり返り，友達と分かちあおう」をテーマに，学内で親睦を図る形式としました。講義後の学生の移動が簡単であったこと，所用のため参加できない教員が，途中から参加することが可能であったこと等，例年にないメリットもあったことが評価されました。入学後３日

目という早い時期に開催できたことも，新入生同士の交流ができ，学生生活への不安を軽減できる機会になったようです。

大学院では，博士前期課程（看護学領域）８名，後期課程（女性・小児発達支援科学分野）２名の入学生を迎えることができました。博士前期課程の入学生のうち，昨年度に開設されたがん看護専門看護師コースには２名が入学し，計３名が在籍することになりました。履修期間を１年経過したことから，８月にはがん看護専門看護師教育課程認定審査申請手続きをすることができました。平成24年１月31日に認可の通知をいただきました。多くの方々にご協力いただいたことに感謝申し上げます。平成19年度に選定された「北東北がんプロフェッショナル養成プラン」は平成23年度までの期限の事業であり，これまでの活動の評価の時期を迎えています。今後も継続に向けた活動を検討中です。

平成23年度の看護学専攻の教員の動向について，ご紹介します。４月には，地域・老年看護学講座（地域看護学分野）の熊澤由美子先生が講師に昇任されました。また，母子看護学講座（小児看護学分野）の助教として，髙倉弘美先生が着任されました。平成19年度から母子看護学講座（小児看護学分野）の助教を務めてこられた平むつ子先生が，９月末日に退職されました。そして，10月には地域・老年看護学講座（地域看護学分野）に藤田智恵先生，母子看護学講座（小児看護学分野）に大高麻衣子先生が助教として着任されました。藤田先生は看護学専攻第１期の卒業生，大高先生は大学院修士課程２期生の修了生でもあります。本学の教育を受けた卒業生・修了生が教員として着任されたことは，学生の良い刺激になると期待しているところです。

わが国における医療を取り巻く問題に対応して，看護基礎教育にも反映されたカリキュラムの改正が行われています。昨年度から開設された総合看護演習は，卒業を目前にした12月に実施されています。４月の就職にむけて知識・技術を統合する貴重な機会となっています。さらに，来年度からは，統合看護実習１単位が加わります。各分野に分かれて多様な施設で実習が行われる予定です。

大学では，国際貢献の役割も求められています。保健学科では，秋田大学と国際交流協定を締結しているフィンランドのケミ・トルニオ応用科学大学との交流が計画されています。看護学専攻の学生１名が22年２月に３週間の日程で短期留学に参加していますが，今後は教員の教育・研究支援や交換留学生の受け入れ等の要望があります。そこで，平成23年11月28日～12月３日まで６日間の日程で，看護学専攻の米山奈奈子先生がケミ・トルニオ大学を訪問してきました。平成24年度にはケミ・トルニオ大学の教員が秋田大学を訪問することになり，国際交流委員会が新設され，活動する予定です。国際的な教育・研究活動につながるものと期待されるところです。

大きな災害にあって，医療者の役割の重要性を改めて感じさせられました。本学の学生もボランティア活動に参加するなど，若い力を存分に発揮しています。学生の行動力に学ばされることも多い１年でした。

後援会の皆様のご支援をいただいたことに，深く感謝申し上げます。今後もご支援くださるよう，よろしくお願いいたします。

理学療法学専攻の動向

理学療法学専攻主任
進　藤　伸　一

今年度の理学療法学専攻の取り組みを簡単にご報告します。

まずは学生たちのようすです。新入生の18名は，県内11名，県外７名，男子５名，女子13名で，それぞれ部活，サークル，ボランテイア活動などに取り組んでいます。２年生は現在，引率教員の指導のもとで直接，患者さんに触れて検査や治療を行う実習をしています。緊張しながらも，白衣姿で患者さんの前に立てることが嬉しいようです。３年生は，４月からの総合臨床実習に向けて準備中，４年生はいま国家試験の準備の真最中です。

つぎに，今年度から理学療法学専攻で新しく取り組んでいることをご報告します。

１つは，新入生オリエンテーションで登山をしたことです。これまでは，金曜日の授業終了後にバスで宿泊施設に行き，簡単なオリエンテーションをし，そのあと夕食を食べながら学生と教員が交流していました。しかし今年は，土曜の早朝に大学を出発し，秋田駒ケ岳に学生と教員がいっしょに登り，山頂でお昼を食べてから下山して宿泊先の乳頭ロッジ（大学施設）に向かい，何人かの先輩理学療法士から学生生活についてのアドバイスを受けるという内容でした。ロッジの定員の関係で，夕食をともにしながらの学生と教員の交流ができなかったのは残念でした。自然の中でいっしょに汗を流す新入生オリエンテーションの新しい試みでした。

もう１つは，学生代表と教員の懇談会を開いたことです。私が海外研修で滞在したイギリスの大学では，学生代表と教員の協議会が定期的に持たれていて，両者の合意で初めてカリキュラムは有効になるのです。そこまでは無理としても，機会があったらぜひ学生と話し合う機会をつくりたいと思っていました。今回は各学年から学生代表３名と教員が集まりました。テーマは，①教育学習環境について，②カリキュラムについて，③学生からの要望などでした。教養教育の内容をもっと充実してほしい，パソコンの台数を増やして使える時間帯を伸ばしてほしい，学年ごとの負担が同じになるような科目配置にしてほしいなど，学生からいろいろな要望が出されました。出来ることから改善していきたいと思っています。

最後は，国試対策を強化したことです。これまでも１年次から年１回，実力テスト（多くは過去の国試問題）を実施し，４年生は模擬試験を受験して個人ごとの到達度を確認しながら学習してきました。こうした努力もあって，これまで国試合格率はほぼ100％でしたが，昨年は残念ながら全員合格できませんでした。それで今年は，学生の弱点科目を分析し，５コマの補講を組みました。また，個別指導も強化しましたので，今年は全員合格できるものと思っています。

以上，理学療法学専攻の取り組みを簡単にご報告しました。今後ともみなさまのご支援，ご協力をよろしくお願いいたします。

学生，その選択の時代

作業療法学専攻主任
石　井　良　和

最初に，平成23年３月卒業の作業療法学専攻５期生20名について御報告します。まずは，国家試験の合格状況ですが，５期生は全員合格を果たしております。ただ，既卒者１名が残念な結果となってしまいました。既卒者の国試合格率はどの養成校でも低く，厳しいのですが，初志貫徹を遂げていただくことを願って応援しています。５期生の就職状況は，10名が秋田県内，８名が秋田県外へ就職しており，本人事情による未就職１名（最近，就職が決まったという連絡あり），進学者（県外）１名となっております。卒業者の半数が秋田県内に就職していますので，近年の傾向とほぼ同様な割合です。

平成23年の４月には19名が９期生として入学しました。11名が秋田県内で，８名が秋田県外の出身者です。昨年までの秋田県出身者が多いという傾向が一段落し，以前のような比率に戻ったようです。３月11日に東日本大震災が起こり，その翌日にはまだ余震の続く中で後期日程試験が実施されるという極めて異例の入試でした。東北のみならず日本全体として失ったものはあまりにも大きいのですが，そうした中で作業療法の学生となった９期生には期待するものもまた大きいかと思います。

大学院の動向ですが，平成23年３月には，大学院修士課程を３名が修了しました。また，大学院への平成23年４月の入学については，博士前期課程には作業療法学分野に２名，博士後期課程には高齢者生活機能支援科学分野のうち作業療法学に関わる領域に１名が入学しております。大学院には学部を卒業してすぐに進学する方もいますが，今年は２名とも社会人（臨床）経験者です。大学院の魅力をこの紙面ではお伝えすることは難しいのですが，一つだけあげるとすれば，それは自分の可能性を広げられることです。学部の授業はどうしても国家試験に合格するための最低限の知識になってしまいます。臨床における様々な困難をそのままやり過ごすのか，最先端の知識に触れてその先を見ようとするのかという選択とも言えます。

先にご報告いたしました入学者や就職なども本来は自らが選択した結果であります。自己選択とか自己決定というと欧米の概念のように思われがちですが，日本人でもある時期には選択に直面する機会は当然あります。教員としてはあまりあっては欲しくないことですが，進路変更も自らが選択したということであるならば，尊重されるべきことだと思います。現代の学生が親の期待から自由になれず，本当の意味での選択ができているのだろうかと考えさせられることがここ数年増えているように思います。そのようなときに学生にかける言葉は教員の立場からではなく，人生の先輩としての立場になってしまいます。こうした立場の使い分けは難しいのですが，どうかご父兄の方々におかれましても，目配り・ご配慮をいただければ幸いです。

看護学専攻の臨地実習について

看護学専攻実習委員
米　山　奈奈子

保健学科の学生は卒業時までにそれぞれ国家試験受験を目指す関係で，臨地実習は必須科目となっています。看護学専攻でも様々な実習を積み重ねることで，学生がこれまで学び得た知識と技術を統合し，看護実践から対人援助技術を習得する上ではなくてはならない学習となっています。対象者の背景や疾患・健康レベルには相違がありますが，実習の場が学生にとって人間理解を深め看護実践の判断力や技術，倫理観が鍛えられる場となっていることは看護学のあらゆる分野に共通しているといえます。

さて，平成23年３月11日には，東日本大震災が起こり，私たちの実習も少なからず影響を受けました。大学病院の改築作業工程が，震災の影響で建設資材の搬入が一時的にストップし,大きく後れをとりました。それは，病棟移転や職員の異動の遅れにつながり，ドミノ式に実習にも少なからず影響が及びました。このように，４月から６月までは特に，実習の受け入れ側で，通常の実習受け入れに加えて，非常時に備えるための多大なご苦労があったのではと思われます。また，施設や病院等では節電対策を迫られる関係で，学習環境としてはかならずしも万全ではない状況も残念ながらありました。そうした状況で，すべての学生が実習を無事終了できたことは，患者さんのご協力や関係者の方々のご尽力のたまものです。

また，実習先では被災地から避難していらした住民や患者さんと出会うこともありました。直接被災地支援に出向くことは叶わずとしても，私たちが自分たちにできることは何かと，考える機会をいただくことができたのではと思われます。

ところで臨地実習の場では，学生は自分自身と向き合うことも大きな学びになります。特に近年の実習では，患者さんから実習協力のための同意を得ることが必須となっており，患者さんの状況によっては同意が得られない場合も発生します。大学病院入院患者の平均在院日数は短縮化が進み，学生が患者さんの回復プロセスに追い付いていけない状況も起こりえます。また，学生の自信のなさが「(自分が) 拒否されるのではないか」という不安につながり，患者さんとの信頼関係の構築に困難を抱える場合も最近増えているように感じます。もちろん，教員および実習施設の実習指導者は，状況に応じて連携を深め，効果的に介入を行っています。しかし，このようなプロセスを経て，学生は確実に成長していきます。卒業時に，一人ひとりが輝いて見えるのは，こうした困難を乗り越え，自分なりの達成感を経験し，看護実践が現実的に感じられるようになるためでしょうか。

臨地実習では，交通費や宿泊費が生じる場合もあり，親御さんやご家族に負担がかかる場合がありますが，臨地実習の特性を理解し温かな関心を持って見守りと支持および支援をしていただけるよう，今後ともご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

理学療法学専攻の臨床実習について

理学療法学専攻
佐　竹　將　宏

理学療法学専攻の臨床実習について説明いたします。

臨床実習とは，リハビリテーションを行っている病院や施設などで，指導者の下，患者さんと接し，学内で学んだ知識･技術を統合･展開する機会であるといえます。

本専攻の臨床実習は，現在，１年次２月に１週間，３年次は９月に2.5週間と１月から４週間，４年次は４月から８週間と６月から８週間の，合計24週間実施しています。その内容は，１年次は見学中心，３年次は２回ともクリニカル・クラークシップ（詳細は昨年度の本稿をご覧ください）中心で行われ，４年次は総合臨床実習ということで，実際に患者さんを担当して学生自らが評価・治療を行います。

これらの臨床実習は，各病院・施設で働いておられる経験豊かな理学療法士の指導の下に，マンツーマンで行われます。１回の実習で各病院・施設に依頼している学生の数は１～２名ですので，全体の臨床実習施設は30か所以上におよびます。本専攻では，秋田県内の各病院・施設といわてリハビリテーションセンターにお願いしています。

秋田大学医学部では附属病院があるので，もちろん，その附属病院のリハビリテーション部門にも臨床実習をお願いしています。一般的に，附属病院があると，学生の臨床実習のほとんどがその附属病院で行われているように思われてしまいますが，現実的に，18名の学生を一度にお願いすることは不可能です。したがって，他の臨床実習施設と同じように，臨床実習ごとに学生を１～２名依頼しているということになります。

臨床実習は，このような病院・施設の臨床実習指導者（スーパーバイザー（supervisor）といいます。学生はよくこれを略して“バイザー”と言っていますが，意味が異なってくるため訂正させます。しかし，どうしても無くならなくて困っています。）に指導を依頼していますが，本専攻では，ほかに，教員が病院や施設で，患者さんのご協力のもと，学生を指導・教育する“理学療法技術実習”という科目もあります。

この理学療法技術実習は２年次の後期に実施され，実質，患者さんと１対１で長時間接する，初めての機会となります。主な実習内容は患者さんの評価です。今まで学生同士で練習してきた評価技術を実際に患者さんに行うわけですが，学生同士であれば，なんとなくできていた評価技術も，実際に患者さん相手ではうまくいかない場合が多く，臨床の難しさを体験し大いに実感する機会であるといえます。

このように，臨床実習，理学療法技術実習は，患者さんの寛容な協力なくしては行うことができません。拙劣な学生の技術や対応に対してご協力してくださる患者さんに，毎回，心から感謝申し上げております。

最後に，本年度は学生19名が総合臨床実習を修了し，国家試験を受験することができたことをご報告いたします。

作業療法学専攻６期生の総合臨床実習を終えて

作業療法学専攻
津軽谷　　恵

今年度は，連休明けの５月９日から始まった４年生の総合臨床実習も様々な予期せぬことに見舞われ11月初めまでかかりましたが，作業療法学専攻６期生19名全員が何とか３期18週間の実習を終えることができました。

４年生で行う総合臨床実習では，県内外の臨床実習施設と臨床実習指導者のご協力を得て，身体障害領域，精神障者領域，子どもの発達障害領域，高齢者の老年期障害領域，地域リハビリテーション領域における作業療法を実際の患者さんや利用者を担当させていただき，作業療法で必要とされる知識や治療技術を学び実践してきました。実習各期終了後には報告会にて，各学生が担当させていただいた対象者の症例報告を行いました。報告会では，学生同士，教員との質疑応答や意見交換が行われ，期を追うごとに徐々に活発なやりとりが行われるようになっていき，実習での成長を実感したときでもありました。各実習施設では，知識や技術以外にも担当させていただいた対象者や他の患者さん・指導者・他職種職員等とどのように接したらよいのかというコミュニケーション能力も十分養われたと思います。はじめから上手な学生は問題ないですが，苦手な学生にとっては大変苦労したと思います。

実習が始まる前，始まってからも，正直すべての課題をこなして全員が実習を終えることができるか不安でしたが，３期の総合臨床実習を通して，身体的にも精神的にもたくましく成長できた学生をみると，発揮できる能力の幅に驚かされます。

６期生は全員が就職先（県内11名，県外８名）を決定しており，その中の３名は，臨床現場で働きながら本学の大学院修士課程への進学が決まっております。そして，国家試験は例年より少し早い２月26日におこなわれ，卒業研究を１月初めに完成させてからこれまで毎日寝る間も惜しんで日夜受験勉強に励んできました。３月30日の合格発表では学生・教員全員が笑顔になれることを願っております。４月からは社会人として，大学生活で学んだ知識や技術を思う存分発揮し，全国で活躍できる作業療法士になってくれることを教員一同期待しております。

最後になりますが，１年次から４年次にわたっての臨床実習はそれぞれの到達目標や時期，期間は異なるとはいえ，本学における臨床教育に対する実習指導者及び病院・施設のご理解とご協力により成り立っております。特に４年次の総合臨床実習では大学を長期間離れての実習になりますので，学生だけでなくご父兄の皆様にも様々な面でご心配とご負担をおかけすることもあるかと思いますが，ご理解とご協力をいただきたく，今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

平成23年度保健学科教育賞を受賞して

作業療法学専攻
石　川　隆　志

平成４年４月に保健学科の前身である医療技術短期大学部の教員になってから，この４月で20年になりました。今ではかつて教えた卒業生が作業療法学専攻の同僚としてあるいは非常勤講師として，本学の教育や研究に活躍しており，本当に時間が経つのは早いものだと感じています。それだけの年月に見合う教育者としての技術が身に着いたかと自分に問うたとき，迷うことなく「はい！」と答えられるかといえば，「まだまだ…」というのが正直なところです。

授業を担当するようになった当初は，どのように授業をすればよいかわからず試行錯誤の毎日でした。それでも学生に知識や技術を伝えなければならないので，作業療法やリハビリテーションについて学んだ母校の先生方，そして大学院で指導を受けた先生方の授業の方法や内容をモデルにさせていただきながら，徐々に自分の授業スタイルを固めてきました。自分が授業をするという立場から改めて恩師の授業資料や当時の自分のノートを見返すと，どのような意図やねらいがその授業時間に込められていたのかを理解でき，今度は教育の方法について多くのことを教授されているように感じます。また，作業療法学専攻だけではなく他専攻の先生方と話す機会や１回１回の授業の学生の皆さんの反応から，教育や授業について考えさせられることも多々あります。それらの情報が自分の授業に影響を与え，統合されてきたのだと思っています。

現在，授業をするにあたって心がけていることは，1）臨床経験や事例をできるだけ授業の内容に反映させ，学生が具体的なイメージを持てるようにすること，2）多くの知識や技術の中で学生にとって重要なことを伝えること，3）面白い，勉強しようと思える話題提供をすること，4）学生に問いかけ学生が表現する機会を持つこと，5）多様な感じ方や考え方があることを共有すること，などです。

担当する科目は同じでも，受講する学生は毎年変わりますし，クラスの雰囲気も違います。授業は学生との相互関係のなかで成り立ちますので，学生をよく観察し（学生もこちらをよく観察していますが…），これからも学生一人ひとりに届く授業を行っていきたいと考えています。

最後になりますが，今回の受賞にあたり，教職員の皆様，保護者の皆様，評価してくださった学生の皆さんに感謝申し上げます。

平成23年度保健学科教育賞を受賞して

看護学専攻
杉　山　令　子

私は、基礎看護学分野の授業を担当させて頂いています。
私の学生時代において、色あせない思い出があるのは、１・２年次の基礎看護学の教授の授業です。「いーい？看護は、おもいだけではできないのよ。」と、幾度ともなく授業中、実習中に、口角を上げて穏やかに発せられた恩師の言葉は、今でも私の心に強く残っています。そして、現在も時折、私を優しく諭してくれます。

私は、恩師のような生涯忘れない熟成されたメッセージを発することは、まだまだできません。しかし、長い看護の道を歩み始めた学生へ伝えるべき、知識、技術、態度を教える一員としての自覚をもって、授業、実習に臨みたいと思っています。

今回の評価対象となった授業は、看護援助技術論で担当した授業の一部でした。２年次後期の授業ということもあり、それまでに学んだ専門知識の蓄積があってこそ、学生が興味をもち、また理解を深めることができたのではないかと思います。

基礎看護学で学ぶのは､看護学の正に基礎。次の学びに進むために、そして、生涯自分の看護を支える礎を築くために、十分に学んで欲しいと願っています。また、学び方も学んで欲しいと願っています。人間は良くも悪くも、忘れる動物です。正確に覚えるべき専門知識も、もちろんありますが、自分で理解できない原理原則などは、例えテスト前に覚えたとしても、すぐに忘れてしまいます。「それって、つまりどういうことなんだろう？」と自分の頭で考えることが重要です。自分の言葉で説明できることは記憶に残ると、私自身が実感しているからです。その手助けとなるような、授業となるように心がけたいと思っています。

大人数対象の講義形式の授業において、よりよい学びを促すためには日々工夫が必要だと痛感します。特に、看護援助技術論や看護援助技術演習における、看護援助の根拠と、具体的な援助方法の理解促進のためには、学生の積極的な授業参加と、適切な教材の作成と活用が必須です。しかし、学生が適切に状況をイメージできるような教材作りに関して、私自身、まだ途上の段階です。毎年学生から頂いている、評価やアンケート自由記述の内容を今後の授業方法や、教材に生かせるよう、様々、改善の努力をしていきたいと思います。

最後になりましたが、評価対象の授業科目は基礎看護学の教員で分担している科目であり、１コマ１コマの授業の積み重なりによって、知識、技術、態度を形成していくものです｡私１人で得た賞ではないと思っています。しかし、私に向け、もっと頑張れと学生の皆さんから応援を頂いたと考え、基礎看護学の学びを深める関わりができるよう、これからも努力を続けたいと思います。保健学科の先生方、学生の皆様に深く感謝申し上げます。

学生からのメッセージ

１年間を振り返って

看護学専攻１年次
山　田　菜　月

１年間を振り返ってまず最初に思い出すのは，３月11日の東日本大震災です。私はちょうど受験と重なってしまい，様々な気持ちを抱えながらの受験，入学となりました。入学当時は不安でいっぱいでしたが，本当にあっという間の１年だったように思います。

１年次は，基礎教養科目と専門科目の両方を２つのキャンパスで学びました。

特に専門科目は覚えなければいけないことが沢山あり，高校とは違うスライドによる授業で，初めはついていくのが大変でした。また授業中に集中力が途切れて，講義の内容が頭に入っていないことも何度かありました。授業後の復習や自己学習もおろそかにしたため，テスト前に焦って詰め込むというような苦労をしました。今後は，テスト直前に焦ることのないように，日頃からコツコツと勉強をしていきたいと思います。

また，一人暮らしを始めてから生活のリズムや食生活が乱れたりと，自己管理がきちんと出来ないことが多くありました。大学の授業は，１回休んでしまうとその分を取り戻すのがすごく大変で，遅刻や欠席をしないということがとても重要であるということを実感しました。１年間で一人暮らしにもだいぶ慣れてきたので，規則正しい生活を心がけ，自己管理をしっかりしたいと思います。

夏休みに行われた初めての実習では，身体・知的障がい者の方が入所している「ほくと」でお世話になりました。ここでは，施設看護師の方について入所者さんへのケアを見学させてもらったり，実際に食事介助などを体験させてもらいました。実際にこのように看護師さんやその他の専門職の方の仕事を間近で見て，本当に入所者さん一人一人のことをよく観察して寄り添ってあげているなあ，ということを感じました。しかしこれらは全て，これまでの経験があるからこそ出来ることで，実際に私が知的障がい者の方と対面した時，どうしていいか分からず戸惑ってしまうことがありました。私もこれから医療の専門職に就く者として，様々な経験を積み重ねていかなければならないと思います。入所者さんの中には，うまく言葉を発することが出来ない方も何人かいましたが，私たち学生に一生懸命自分のことを伝えてくれようとしてくれたことが強く印象に残っています。

２年次からは本格的に専門分野の学習が始まります。今まで以上に授業や実習が忙しくなり，「看護」という分野と真剣に向き合っていかなければなりません。不安なこともたくさんありますが，大学で学んだこと，自分で考

えたことや感じ取ったことが必ず，将来看護師として働く時の糧になるはずです。２年次からは，いっそう気を引き締めて勉学に励み，充実した大学生活を送りたいと思います。

３年間を振り返って

看護学専攻３年次
高　橋　道　子

３年生が終わろうとしている今，なぜか合格して嬉しかったはずの入学式や，１年生や２年生では何をしていたか即座に思い出すことができませんでした。今，私の頭の中は４月から始まる実習や卒業研究，就職活動，国家試験のことでいっぱいになっていることに気がつきました。私は助産師になることを夢に描いて看護学専攻に入学したのですが，実際に講義や演習を経て，数名しか選抜されない助産コースの一員になれるか，長い実習に耐えられるか，看護師，保健師，助産師の国家試験に合格することができるかと悩み目標を思い切って変更することにしました。

今，自分の大学生活を振り返って最も印象的だったことは，やはり病棟での実習での場面だと思いました。私は実習が始まるにあたって，患者さんとコミュニケーションをもつことができるか心配でした。実習が近づくにつれて気持ちが沈んでいくのがわかりました。自分は看護師に向いていないのではないか，というところまで悩みました。悩んでいるうちに，患者さんとの出会いは一人の人との出会いであり，患者さんがどのような人なのか理解するように努めよう，出会う前から悩んでいても仕方がない，と思うようになりました。実際に病棟実習が始まると，ご自分の病気に対して前向きな患者さんであったことも助けとなって，不安は消えてしまっていました。ある日患者さんがいつもと違って元気がないように見える日がありました。特に不調の訴えもなく，退院も近いのだから元気がなくなる理由は見当たらないのに，と思っていました。口数が少なくなっている患者さんに声を掛けることは勇気がいりましたが，「元気がないように見えますが。」と率直に伝えました。すると「退院は決まったが，この後がなあ。」と退院した後に心配していることを話してくださいました。担当看護師さんにこのことを報告し，援助について助言を受けました。担当看護師さんからは慢性疾患を持つ患者さんは不安な状態で退院する方も多く，その不安を看護師は理解することが大切だと教わりました。看護職が患者さんの気持ちを理解しようとしていること，患者さんの気持ちに寄り添う看護をしていることを肌で感じることができ，私もそのような看護がしたいと強く思いました。

１年生，２年生の頃にも楽しいことや夢中になったことがたくさんありました。そういえば，その時も今のように精一杯でした。助産師になるという目標は断念しましたが，実習を通して看護師としての自分がはっきりと見え，将来の理想の看護師像も思い描くことができました。４年生ではこれまで以上に長期間の実習があり，患者さんや医療従事者，多くの職種の方々と出会うことになります。一つ一つの出会いを大切にしつつ，人との関わりから多くを

学びたいと思います。実習に加えて自分の将来を左右する大きな課題も待っています。それらを乗り越えて理想の看護師に近づいていけるよう努力していきたいと思っています。

初年次を振り返って

理学療法学専攻１年次
鎌　田　凌　介

私がこの一年間を振り返ってみると，実に様々なことがあったと実感する。そして，まだ高校生だった頃，理学療法士という職業に興味を持ち始めてから二年が経過したと考えると，時間の経過というものは本当に早いものだと心から感じさせられる。医学を志して大学に入学し，こんなにもあっという間に一年が終わってしまうとは驚きである。しかしそれも，充実した大学生活を送り，同じ意志を持った仲間たちと出会えたからであろう。

入学当初は何もかもが初めてで，毎日が驚きと感動の連続だった。勉強面では聞いたこともない単語などがたくさんあり，戸惑う面が幾多とあった。しかし，そんなことを思っているのは自分だけでなく，周りにいる17人の仲間も一緒だということに気が付いた。18人という少ない人数ではあるが，一人ひとりが個性的であり，また何よりもそれぞれが優しく，心の中に自分が目指している理想の理学療法士像を描いているということから，すぐに打ち解けることができ，辛いことも一緒に頑張ることができた。

一年を通して印象的だったことと言えば，障害体験実習がある。これは実際に障害者の気持ちになって模擬体験を行うというものなのだが，私は今までに大きな怪我などをしたことがなく，車椅子に乗って行う実習は実に新鮮な体験であった。実際に車椅子からの視点から眺めてみると，100％とは言えないが障害者の気持ちをより理解することができた。歩道が斜めになっていて車椅子では走行しにくいところ，目線が常人の半分ぐらいしかないということから様々なものが見えにくいということなど，普通に生活していては気づかないようなことばかりであった。この実習を通して，少しではあるが障害者の気持ちが分かったような気がして，なんだか嬉しくもなった。

一番心に残っているのは，基礎臨床実習である。実際に医療の現場に行き，患者さんと触れ合い，担当の理学療法士さんの行うリハビリを目前にして，自分の中のPTに対する意識を高めることができた。しかしそれと同時に，医学の深さを思い知らされた。自分の予想していたものよりもはるかに厳しい医療の現状。慢性的な病気であったり，原因不明の病。自分はこんなにも深く，大きな世界に足を踏み入れているのだと感じ，はたして自分はやっていけるのだろうかと不安になった。だが私はそれをただの不安にせず，自分の将来の夢へと続く道を進むための大きな起爆剤として捉えることにした。

私は，この一年間でどれくらい成長できたのだろうか？そんなことばかり考えている日々が続いているが，自分が「成長」について考えている時点で，少なくとも私は成長できているのではないかと考えている。これからも悩みや不安は増えてくることだろう。しかしその大きな壁を，私は17人の仲間たちと共に乗り越えていきたいと願っている。

必要とされる理学療法士を目指して

理学療法学専攻４年次
鈴　木　華　子

私たちは入学してから理学療法士に必要な知識・技術を学んできました。それとともに多くの方々との繋がりを通して，人間として大きく成長することができたと思います。さらにこの大学生活は理学療法士への想いがより一層強くなった時期でした。４年前の,「患者さんに，この人にPTになってもらいたいと思われるPTになろう」という先生の言葉が印象強く残っています。そのときはただ何となく，漠然とした今後の目標としか捉えていませんでした。しかし臨床実習などの経験を通して，先生が私たちに伝えたかったことを強く意識することが出来たのではないかと思います。実際に患者さんと触れ合い，学生であっても患者さんにとっては一人の理学療法士であり，一つ一つの行動に責任をもち信頼されなくてはいけません。また患者さんのゴールは一人一人異なり，そのなかで患者さんにとって最適な治療を可能な限り提供していくことが重要です。しかしどのような時も私が一番に心掛けていたことは，患者さんが主体的に楽しく喜びを実感していただけるようにリハビリに関わっていただきたいということです。これは決して簡単なことではなく，経験・知識もまだまだ学生レベルでしかない私たちには難しいことです。しかし臨床実習のなかで「ひたむきさが感じられ患者側にもそれが伝わり，勇気づけられました」という言葉を患者さんにかけていただきました。自分本位で取り組むのではなく，患者さんのことを真剣に考える誠実さ・優しさのもと，一生懸命に物事に取り組んでいくことが，大切で重要であると思いました。このような経験を通じて，理学療法士として関わることで人生の楽しみや面白みを引き出し，担当してほしい，担当してもらって良かったと患者さんに感じてもらえるPTになることが，私たちに求められることではないかと思います。勉強すること，技術を磨くことなど自分の成長は自分自身のためだけではなく，将来の患者さんのためであると実感することができました。辛いことや困難なこともありましたが，いつも乗り越えてこられたのは,「患者さんに必要とされるPT」という４年間で明確となった目標があったからだと思います。

このようなことを教えてくださった先生方，今まで出会ってきた数多くの方々，そして実習生の私に優しく温かく接してくださった患者さんに深く感謝しています。本当にありがとうございました。また私たちのクラスは19人という少人数でありましたが，どんなときでも支えてくれた友達の存在も大きく，その大切な仲間とともに過ごした４年間はかけがえのないものです。卒業すればみんなで笑って過ごす日々がこなくなってしまうのはすごく寂しくもあります。しかし大好きなクラスメイトと大学で学んだことを糧に，それぞれ必要とされる理学療法士を目指し，これからも頑張っていきます。

一年間を振り返って

作業療法学専攻１年次
長谷山　知奈未

私たちの大学生活は，入学式がないままスタートし，入学当初は大人数，パワーポイント形式，一コマ90分という，高校とは全く違う講義，環境で苦戦していました。また，自分で単位数も考慮しながら，カリキュラムを立てるということにも戸惑っていましたが，そんなとき，先輩からアドバイスをもらったり，クラスメイト同士で相談しあったりして解決しながら，だんだんと大学生活に慣れていきました。

私にとって，この一年間の勉強は楽しいものでした。私の言う「楽しい」というのは,「楽ちん」や,「簡単」といった意味ではなく,「充実」したという意味です。自分が選択した講義だからこそ，その講義に対して，集中力がうまれ，責任も感じました。また，医療系の道へ進む者には必須である，人体構造学，人体機能学の授業ではすべてのことが初めてで，とても新鮮に感じられました。覚えることが多くて，くじけそうになるときもありましたが，ここでも仲間たちのおかげで乗り切ることができました。互いを信じあい，互いに助け合うという関係をこの一年生18名と築け，毎日一緒に勉強できることは私の大学生活の中で得られた財産の一つです。この先，楽しいことばかりでなく，衝突したり，ケンカをしたりすることも，時にはあると思います。自分と他者は意見がいつも同じとは限らないので，衝突が起こるのは悪いことではなく，私は本心をぶつけることが大切だと思うし，それを乗り越えたら，さらに私たちの絆は深められると思います。

この一年は，人とのつながりを強く意識し，実感する一年でした。初めて家族から離れて，一人暮らしをして気づく家族のありがたみ。仲間と過ごすかけがえのない楽しい時間。分からないことを親切に，ていねいに教えてくれた先輩方。それぞれの長所をあらわすような個性あふれる授業をしてくれた先生方。多くの人たちによって，私は支えられていて，普段は意識しなくても人はだれかと必ずつながっており，そのつながりは大切なことだということを感じました。出会ったすべての人に心から感謝しています。

全く無知であることを勉強しているとどうして今，この勉強をしているのか疑問に思うことがありました。ある先生は，「私たちが学んでいることは大きな木の根の部分に相当し，すべては一つの木につながっている。」と言っていました。根っこがしっかりと地面についていないと，強風，嵐など外からの力によってとばされてしまいます。そうならないために，今は根っこをしっかりと地に根付かせる時期で，徐々に根，幹へと成長し，最後にはひとつの木になると考え，現在勉強をするようになりました。やがて，いつか作業療法士としての花が開く日まで，１日１日を大切にし，これから出会う人との出会いを楽しみにさまざまなことに挑戦して，いろんなことを吸収し，大きくて頑丈な木を育てていこうと思います。

4年間を振り返って

作業療法学専攻４年次
加賀美　　開

今，卒業を目前にして４年間の大学生活を振り返ると本当にあっという間であったと感じています。特に４年生になってからは実習や卒業研究，国家試験対策に追われ一瞬で過ぎ去ったように思われます。あっという間の４年間でしたが，本当に濃密な４年間であったとも感じています。楽しいこともあれば苦しいこともありました。テストやレポート，実習，卒業研究，国家試験など１人では乗り越えられなかったことも多かったです。そういった課題をクリアするたびに仲間の存在の大きさに気づきました。今の４年生だからこそ充実した４年間になったのではないかと思います。

私たちの学年は非常に個性が強く，まとまりがあるとは言い難い学年です。そんな私たちですから，国家試験のグループ学習をするようになってからお互いのことを知ったり，課題を一緒に行う様になってから相手のことを知ったりと言うこともありました。しかしそれが悪いことだったとは思いません。その場面場面で足りない所を補い合って４年間過ごしてきました。行き当たりばったりのようにも思いますが，何かを行う時に補い合って生まれた絆は通常よりも固いものであったように思います。さらに言えば一つの目標に向かう時も一丸となって向かうと言うよりはそれぞれのアプローチがあったように思います。このことは手段の多様さを示し最善策を模索することになっていたように思います。そのなかでつまずく人がいれば手を貸し，なんとか４年間を終えることが出来ました。寄り道をする人も多く先生方には大変お世話になりました。大分，特殊な集団であったと思いますが，今思えばこのメンバーだから上手くいったこともあるのかと思います。

また私個人としては，この４年間で考え方や価値観が大きく変わったと思います。入学したてのころは「作業療法士になる」という漠然とした目標を掲げ，ただ目の前の課題をこなすことに精一杯でした。その後，大学の授業や臨床実習を経て作業療法とは何かを考えるようになりました。そして今はどのような作業療法士になりたいかという将来像が少しずつですが明確になってきました。これから実習生としてではなく１人の作業療法士として臨床の場に出ていくことになりますが，始めの「作業療法士になりたい」という熱い気持ちを忘れることなく日々，理想の作業療法士になるための努力をしていきたいと思います。

今，私たちが笑顔で学生生活を終えることが出来るのは，先生方，家族，実習でであった方々がいたからです。本当に感謝しています。ありがとうございました。今までの感謝の気持ちを立派な作業療法士になることで示したいと思います。

陸上部員であること

看護学専攻１年次
川　上　森　也

私は小・中・高と陸上を続け，小・中学校では長距離を高校では跳躍を経験してきました。大学では新しい部活をやろうと思い陸上部には入りませんでしたが，２カ月ぐらいが経つと高跳びのマットが恋しくなり最終的に陸上部に入ることを決めました。

高校から高跳びを始めましたが，小学２年生からトランポリンをやっていたおかげで空中感覚と足のバネがついていたので秋の新人戦では全県で５位になることが出来ました。しかし,冬季練習中に右膝脛骨結節部（膝下あたり）を剥離骨折してしまいました。これからだって時に怪我をしてしまい大きなショックでした。でも，また跳びたい一心でリハビリを頑張りました。半年くらいのリハビリによりまた走ったり跳んだり出来るようになりましたが，痛みを伴いながらのことでした。だから，２年生では大会に出ることができませんでした。３年生になってもいい記録は出ませんでした。ようやく痛みが消えたのは大学に入ってからでした。高校の頃不完全燃焼で終わっていた分，全医体で成績を残せたことがとても嬉しく感じ支えとなってくれた部員の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。

陸上部の練習は入部した当初は県立大のグラウンドまで車で20分くらいかけて移動し練習をしていました。だから，部活の始められる時間は早くとも６時だったのでみんな暗くなるまで一生懸命走っていました。そのグラウンドには走り幅跳びや三段跳びの練習をするための砂場はありましたが，高跳びのマットがなく技術面での練習は十分にはできませんでした。でも，大会が近くなると先輩たちが車を出して八橋競技場という環境の整った施設で練習をする機会を作ってくれました。そのおかげで技術面の練習もすることができ，大会に集中することができました。今では工事中だった手形の競技場が完成し，移動時間が短縮されその分練習時間が増えました。

正直なところ高校生のときに怪我をして以来，走り幅跳び・高跳び・三段跳びの自己ベスト更新はできないだろうと思っていましたが幅跳び・高跳びは自己ベスト更新，三段跳びについては自己ベストまであと１ｃｍとせまり次の大会も頑張ろうと思いました。

私は大学をあわせ４つの陸上部に入ってきましたが，１番楽しいと思えるのは大学の陸上部だと思います。部員も多く，競技を楽しむ人やイベントを楽しみにする人，健康作りのために走る人など目的は違うけどもみんなの共通しているところは医学部陸上部を好きであるということです。そのため，部活の雰囲気が良くなり楽しく練習することができます。このような環境はなかなか作れないと思います。最後に私を人間的に成長させてくれる，支えてくれる仲間がいる陸上部に入って本当に良かったと思います。

サークル活動

学びの想いによせて

秋田スポーツメディカルコンディショニング研究会 代表
理学療法学専攻３年次
加賀屋　勇　気

前代表の高橋裕介氏から委託される形で代表になったのですが,彼の「自由にやっちゃってください」の言葉を受け，これまでのやり方を切り替えてまさに自由にやらせていただいた１年でした。おそらくこの２年間も同様に自由な形式で活動してきたと思うのですが，今年度の目標はその形式に一定の形をつくること。いわば今後活動がしやすくなるように活動のプランを明確化することでした。その点を顧問である齊藤明先生とともに考え,「学生間での学びの受け継ぎ」をテーマに活動を始めたのですが，現在道半ば。もう１年，後輩の協力も得ながらASMCの活動を創っていきたいと考えています。また，昨年度は理学療法士として幅広く活躍する山口光圀氏の勉強会にも参加。学生の場合，参加したくとも金銭的に参加できない場合があり，サークルからは参加費を支援することにしました。結果,貴重な学びができ有意義な活動,支援ができたと考えています。

研究会という名の通り「学び」に主眼をおいたサークルであり，決まった型もなく学生が主体的に学びの場を作り，自分の意思で学ぶという大学における本来の学びを具現化したようなサークルです。その分課題も山積みですが，今後ASMCが学生の「学びたい」という想いを最大限活かしていける場になるように皆と頑張っていこうと思います。

園芸から学んだこと

園芸農業クラブ saryo 代表
作業療法学専攻３年次
村　田　航　也

先輩方が作り上げてきた庭を，例年通りその年の３年次が引き継ぐこととなり，声がかかったのが僕でした。

歴代の先輩方が作り続けた庭はもうすでに完成形で，これを引き継ぐと同時に，絶対に廃れさせてはいけないという重圧を背負うこととなった。実際３年次は実習なども始まり，授業が昨年度までとは比べ物にならないくらい忙しく，その中で庭の活動を継続していくことは簡単ではなかったが，この活動を通して，グループで活動することの楽しさや価値，そして植物を育てるために大切な企画力などを学ぶことができたと思う。

また，始めは使命感で活動をしていたが，いつの間にか庭を見に来るのが楽しみになり，活動がない日にも庭来ることが多くなっていった。これも園芸を通して生き物を育てる楽しみや，日々の変化を観察できる楽しさを感じることができたからではないかと思っている。

また歴代の先輩が口をそろえて言っていた「他の専攻の学生にも利用してほしい」ということに関しては，理学療法専攻の学生が昼食を庭で食べていたようで，こういう風にだんだんと認知されていけばいいなと非常に感慨深かった。大変だとは思うが後輩たちには，だれでも気軽に使える庭を目指して頑張ってほしい。

最後になるが，協力してくださった先生方，諸経費・活動場所等提供してくださる大学側に感謝の意を述べて終わりたいと思う。

私たちの憩いの場

区画活性課 代表
作業療法学専攻３年次
小　阪　翔　子

区画活性化は，校内の使われていない区画を利用して学生の憩いの場をつくろうという先輩方の思いから４年前に結成されたサークルです。今年度も園芸農業クラブsaryoと協力し，園芸活動やクリスマスイルミネーションの装飾を行いました。１年の活動を通し，学びの場である保健学科棟の環境を，当事者である学生が充実させるということの大切さを改めて感じてきました。

私は大学生活を送る中で，保健学科棟には学生たちがくつろぐことのできる休憩スペースが少ないと感じてきました。２年次まではただ思っているだけで，なかなか行動に移すことはできませんでしたが，３年次になり，このサークルを引き継ぐことになると，まずは実行に移すことが重要だと考えるようになりました。少しでも多くの方がくつろげる庭づくりをしていこうと部員同士で意見を出し合い，春から活動を続けてきました。校舎裏の小さな区画ということもあり，認知されにくいという問題点もありましたが，活動を続けるうちに他専攻の学生が休憩時間に庭で昼食をとっていたり，ベンチで会話を楽しむ様子が見られるなど，徐々に憩いの場として定着してきたことを実感した１年でもありました。

来年度以降は，さらに活動の幅を広げ，より多くの学生や教員に親しんでもらえるような環境づくりをしていけたらと考えております。

最後になりますが，協力してくださった先生方，後援会の皆様，４年生の先輩方に感謝を述べて終わりにしたいと思います。

釣りサークルの活動

釣りサークル 代表
理学療法学専攻３年次
松　浦　一　輝

私たち釣りサークルは，秋田県内で釣りを行い，自然と触れ合う機会を作ろうと思って活動しています。今年度は幹部が三年生ということもあって，なかなか活動の機会は作ることができませんでしたが，それでも何度かは活動を行い，釣果もほどほどに得られました。

私たちはほとんどが釣りの初心者であるため，主にサビキで釣りを行い，アジをつることが多いです。もちろん，投げ釣りを行うときもありますが，サビキでの釣りに比べ，待つ時間が長かったり，時には何時間粘っても一匹も釣れないことがあるので，初心者の私たちにはやや合わないのです。待つことこそ釣りの醍醐味であるという方もおられますが…。むしろ私たちのサークルにとっては，釣った魚を肴にして飲み食いをする方が醍醐味となっています。

来年度は私たちもいよいよ四年生となり，さらにサークル活動を行う機会も減ってくると思いますが，できるだけ，活動を行い，さらにそれらを後輩に引き継いでいきたいと思います。

スポーツ研究サークル

理学療法学専攻３年次
瀬　川　槙　哉

私たちスポーツ研究サークルでは，春・夏には医学部の体育館を使ってバレーボールやバドミントンなどの様々な球技，または水泳を行い，また冬になるとスキー場へ出かけてウィンタースポーツをみんなで仲良く行ってきました。

スポーツには体力向上，ストレスの発散，生活習慣病の予防など，他にもたくさんの健康におけるメリットがある事が知られていますが，大学生になるとカリキュラムでは運動する時間が設けられていませんし，忙しさからなかなかする時間がないという人が多くなってくると思います。また運動はしたいけれど部活ほど真剣に取り組みたくはない，という人もたくさんいるという事も事実として挙げられます。

そのため私たちのサークルでは医療人として日々健康でいることの大切さを考えながら，無理のない範囲でスポーツをみんなで楽しく行う，という事を目標に活動してきました。この一年を通しまして，各個人が団体でスポーツすることの楽しさ，健康でいるという事の大切さを考えながら活動できたという事は，今後医療の現場で働いていく私たちにとって非常に有意義なものになったのではないか，と思います。

今後もスポーツを通して健康であることの大切さ，素晴らしさを学び，医療人として考えを深められればなと思っています。最後になりますが協力して下さった先生方，後援会の皆様に感謝の気持ちを述べたいと思います。ありがとうございました。

旅サークルの活動

理学療法学専攻３年次
松　浦　一　輝

私たち旅サークルは、秋田県内を主として様々な場所へ出かけて、そこで様々な体験をするということを目的としています。
東北人、または秋田県人であっても、意外にも県内で訪れた場所が少なかったりするというとが、このサークルを作ってみて初めて分かりました。

私たちの活動として、地域での様々なイベントに参加するということも含まれており、今年度は、横手のふるさと村や、土田牧場、田沢湖などに行きました。また、参加は少人数ではありましたが、湯沢での犬っこ祭りや横手でのかまくら祭り、男鹿での紫灯祭りなどの祭りにも参加してきました。生でかまくらや犬の雪像、なまはげなどをみることができたのは、非常に貴重な体験であったと思います。

来年度は四年生となり、活動に行く機会も減ってくるかもしれませんが、それでもできる限り活動し、地域の素晴らしさを知ることができればと思います。また、これらの活動を、後輩たちに受け継いでいきたいと思います。

刺激し刺激され合う場

エンジョイリハ！ 代表
理学療法学専攻２年次
青　山　　祐

大学の授業では，先生から学生への一方通行の学びが多くを占めています。そこで学生同士や学生と先生間で意見を活発に交換し合う場をなんとか作りたいという思いで作ったのがこのサークルです。主な活動内容は，課題を自分たちで設定してそれについて議論を交わしたり，医療的または人間的に深い学びのある映画を鑑賞して，見終わった後に皆で学んだことや気づいたことを話し合ったりすることです。昨年は黒澤明監督の映画『赤ひげ』を８人で鑑賞しました。初めての活動だったので活発な場になるか不安な面もありましたが，見終わった後，医療を担う者としてどうあるべきか，映画の中ではあんな考え方をしていたけれど自分はこう思う，など感想や意見は尽きることのない有意義なものとなりました。一年目ということでまだ十分な計画や活動が行なえなかったという反省があります。来年度は活動をさらに増やして，参加する人全員が良質なものをインプットし，それぞれがアウトプットすることで刺激し刺激され合うような場，機会を増やしていこうと思っています。

最後になりましたが，魅力的な本や映画などを紹介していただいている顧問の進藤先生やサークルのメンバー，後援会の皆さまのご協力に感謝申し上げたいと思います。

ダンスという活動を通して

理学療法学専攻１年次
鎌　田　凌　介

私は大学に入学したら，ダンスを始めようと高校生の頃から思っていた。しかし私が所属している医学部にはダンスサークルがなく，どうしようかと悩んでいたところ，ダンスをやってみたいという同じ意志を持った仲間たちと共に，医学部にこのサークルを設立することにした。１年次ということから大学について全く知らない状況であるなか，私が部長を務めることになった。

結成したのは７月とだいぶ遅くなってしまった。そして私たちのサークルにはダンス経験者が１人しかおらず，どのような形で練習したらいいのか日々考えてきた。ましてや部員はそれなりにはいるものの，兼部をしている人が大半で，全員そろって練習するといったことはめったになかった。方向性も明確には定まらず，部長としては残念な限りである。

今年１年は低迷した年になってしまった。しかし，結成してまだ１年目だということから，これからもっと躍進していくものだと考えたい。来年度は，もっとダンスに興味を持ってくれる人が増えてくれたらいいなと思う。確かにダンスをしたことがない人は多いかもしれない。実際に私もその一人ではあるが，やってみたいという意志は誰よりも強いと思っている。準備は万端なので，この意志を部員と共有し，来年度こそしっかり活動できるようにしたい。

最後になるが，活動に協力してくださった顧問教諭，大学側に感謝したい。

学務委員会活動の平成23年度を振り返って

学務委員長
兒　玉　英　也

後援会の会員の皆様に，平成23年度の学務委員会活動の１年を振り返りまして，ご報告申し上げます。

最初にお伝えしたいのは，長年の基礎教育での検討事項であった英語教育の強化に関連して，２年生を対象として新たな英語科目「大学英語Ⅲ」が来年度より導入されることです。背景には，秋田大学の国際化という命題があるわけですが，これまでなかなか語学教員のマンパワー不足やカリキュラムの過密等で実現できませんでした。それが今回，手形キャンパスに行く機会の乏しくなる２年生のため，英語の教員が本道キャンパスに出向いて講義を行うと言う，願ってもない形で実現することとなりました。これにより，従来１年で終了していた言語科目の履修が２年にまで継続して行われるようになります。学生には，教員の熱意にこたえるべく，自己の語学力をさらに高める学びの機会にしてほしいと願います。

また，来年度の専門教育の成績評価にも，S評価が導入される運びとなりました。S評価は従来のA評価の上位の評価で，学生のその科目の修得レベルが極めて高いことを意味するものです。これまで教養基礎教育科目のみで導入されてきましたが，今回それを専門科目に拡大することとなったものです。学年進行に応じて導入するかどうかの議論もありましたが，来年度から全ての専門科目で同時に導入することとなりました。

もうひとつは評定平均値（GPA）の専門科目への導入です。GPAは，学生の学習状況を示す指標として認知されており，教養基礎教育科目では平成24年度以降の入学者から導入予定となっております。それを専門教育まで拡大するかに関しては，GPAが専門教育にそぐわない側面もあることから，昨年から議論されてまいりました。そして最終的に，保健学科の専門科目を含めた全科目を対象としてGPAを算出することとなり，来年度より成績報告や証明書等にその値が掲載される運びとなりました。GPAをどのように専門教育の場で有効活用するかは，これから我々が慎重に考えていかなければない課題と考えます。

今年１年を通じて，やはり残念なのは様々な事情から退学に至った学生が少なくないことで，一抹の寂しさを覚えます。しかし，大震災と言う大きな出来事がありましたが，学務委員会としては概ね大過なく過ごせた１年ではなかったかと思います。来年度より，昨年まで管理委員会で議論されていた大学院博士後期課程の案件が，完成年度を過ぎたことから学務委員会で議論されることとなり，学務委員会の活動範囲がより拡大することになります。委員会活動の仕事量も増加すると思われ，なお一層の皆様のご協力を，よろしくお願い申し上げます。

平成23年度入学試験について

入試委員長
水　沼　秀　夫

2011（平成23）年は，東日本大震災という悲惨な大災害に見舞われ，生涯忘れられない歴史的な一年でした。未だに地震そのものの被害からの被災地の復旧もままならないうえに，福島原発の破壊による放射性物質の大量飛散の結果，放射線被曝に対する危険と恐怖が福島の人々をはじめとして多くの地域の人々を苦しめ，いつ平常に戻れるか全く見通しが立たない状態が続いています。

秋田大学の入学試験も，この震災により大きな影響を受けました。震災のあった３月11日は後期日程入学試験の前日でした。幸い秋田市では地震によって全域で停電にはなりましたが，それ以外に大きな被害はありませんでした。秋田大学でも建物その他に大きな被害はなかったため，入学試験の実施には支障なく，翌日の試験は予定どおり行われることになりました。しかし、保健学科では，試験当日の朝になって，一番収容人員の大きな大講義室が屋上の雪が溶けたものと思われる水が天井から漏れ落ちて床や机が水浸しで使用できない事態になっており，急遽試験室の変更を余儀なくされましたが，試験開始まで時間があったので，試験室を別に用意し，無事試験を終えることができました。停電のため、照明のない中での試験となりました。

震災が起こったのは後期日程試験の前日であったため，秋田県外からの受験生の多くがすでに地震前に秋田に到着していた模様で，受験者の数は例年の後期日程試験とそれほど変わりはありませんでした。県外出身受験生諸君は，試験は無事に受験できたのですが，帰宅には大変な困難に直面することになったようです。交通が完全にストップし，足止めを余儀なくされ，臨時の宿泊所などで交通再開を待ち、数日かかってようやく帰宅できた受験生も多かったようでした。

後期日程試験の受験者数は例年と大差なかったとはいえ，大災害直後の試験なので，当然受験できなかった予定者もいると考えられるため、追試験を実施することになりました。入学試験の追試験実施は，秋田大学ではおそらく初めてだと思います。３月18日に行われ，看護学専攻３名，理学療法学専攻2名，作業療法学専攻４名の計９名が受験しました。

このように後期日程の一般入学試験は異例ずくめの事態になりましたが，それ以前に執り行われていた入学試験は全て無事終了していたので，４月には例年どおり看護学専攻は推薦入学試験，前期日程試験，後期日程試験の各々の合格者を合わせて70名，理学療法学専攻は18名，作業療法学専攻は19名，それに看護学専攻の３年次編入学生10名の合計117名を晴れて秋田大学の新入生として迎えることができました。

平成23年度FD講演会について

FD委員会委員長
浅　沼　義　博

後援会だより20号でも説明したことですが，FD（Faculty Development：ファカルティ・ディベロプメント）とは，大学教員の教育能力を高めるために，組織として，授業評価システムの導入などの実践的取り組みを行うことです。このFD活動には，後援会からも財政的支援をいただいており，毎年教員の授業内容と方法の向上に資する活動を行って参りました。平成22年度は，早稲田大学大学院の西條剛央先生を招き，質的研究の入門編を企画し，講演会やワークショップを通じてご指導いただきました。

平成23年度は，質的研究の各論として，日本赤十字秋田看護大学の中村順子先生に「Grounded Theory Approach（GTA）研究の実際」と題して，ご講演いただきました。ここでわが国の看護の領域における質的研究の有り様を概観してみます。わが国の「看護」に関する「原著論文」のうち，質的研究方法の代表である「内容分析」を用いた論文の数は年間200～250編（図1），「KJ法」では年間70～90編（図2），「GTA法」では年間40編前後（図3）です。そして，これらを合計すると年間300～400編であり，看護の原著論文の総数（研究総数）の10%程度（図4）となっています。質的研究は上記3つの方法の他にも，現象学やエスノグラフィーなどの方法もあり，それらを加味すると，研究総数における質的研究の割合は15%位になるものと想定されます。然るに，秋田大学ではこの質的研究に関する論文は非常に少なく，組織としてこの領域の底上げを図る必要に迫られている現状です。

この度，中村順子先生には，ご講演と全体討論，さらに個々人への直接指導等で丸々3時間に亘り，ご指導いただきました。リッチなデータを元に，論理的かつ地に足のついた説得力のある熱血指導であり，参加した70名余が看護研究の面白さを体感できたものと思います。今回で質的研究をテーマとしたFD講演会はひとまず終了です。次年度からは，大友和夫先生（保健学科長，FD委員会委員長）の新たな構想の下でFD講演会が開催されることになります。引き続き，後援会からのご支援をよろしくお願い申し上げます。

放浪癖
― 思い出の山旅，その３ 薬師岳 ―

理学療法学専攻
岡　田　恭　司

小説「デイヴィッド・コパフィールド」を読んだのは高校生の時だったろうか。幼いデイヴィッドがたった一人の身内となってしまった伯母を訪ね，ロンドンまで何日も歩き続けるくだりが今も忘れられない。子供が苦境に耐えながら頑張っている姿を想像すれば，胸がかきむしられる思いをするのが普通だろうが，高校生だった私は不謹慎にも，自分もいつかこんな旅をしてみたいと思った。それ以来「放浪」という言葉が私のキーワードになった。車を選ぶときも車名が「叙事詩オデッセイ」の他に「放浪」という意味があるホンダのOdysseyに決めたし，映画は「男はつらいよ」が好きであった。ただ寅さんの様な旅などできるはずもなく，そのため単独でテントと食料をかつぎ思うままに歩き回るという，見方によっては放浪に近い山登りに興味を持ったのではと自分勝手に思っている。

私の山登りは秋田大学に入学し，自分で車を運転するようになってから本格的に始まった。中でも濃い霧の中，黒湯温泉から乳頭山に一人で登ってからというもの，完全に山にはまってしまった。実はこの時，30分ほど霧にまかれ道に迷ったのだが，遭難などは少しも考えず，そこから無事に山頂に辿りつけたことがとても嬉しく，また迷いながら彷徨い歩く気分が性に合っていることに気が付かされたのである。大学在学中は週末毎に鳥海山や秋田駒など県内の山を登るようになり，勤め始めて経済的余裕が生まれると，北アルプスや南アルプスを始め日本全国の山にも足を延ばすようになった。秋田からは夜行列車を使うと富山が近いので，立山には何度か足を運んだ。立山に登って南の方角を見やると，平たい緑の五色が原の向こうに白く輝くような，大きな大きな山塊が見える。薬師岳である（図１）。濃い土色や緑に覆われた他の山に比べ，私には薬師岳は一人だけ輝いて見え，いつかあの広大な尾根を一人で彷徨い歩きた

いと思っていた。

2009年の夏，松本経由で新穂高温泉から登り始めた。薬師岳へは３日はかかる道のりである。もし最短距離で登るなら，富山県側の太郎平から入ればよいのだが，薬師岳の頂上に至る前にほかの所で放浪をしたかったのである(図２)。最初はわさび平にテントを張り，翌日急な笠新道を登り稜線上に出た。一点の曇りもない晴天で北アルプスの山々が一望できる。笠が岳頂上直下に早めにテントを張り，周辺をうろうろしたり日向ぼっこをしたりして半日を過ごした。その夜に大変な冷え込みを経験した。テントの中でも温度は氷点下となり，持参していた夏用の寝具では寒くて眠ることができないまま翌朝を迎えた。そこで翌日は急がずに，抜戸岳，大ノマ岳，弓折岳と寄り道を繰り返し，ようやく双六のテン場に至った。できればこの日のうちに西鎌尾根を辿り，槍ガ岳の近くまで行ってみたかったが，寝不足だから用心しようという理性が働き，早めにテントに潜り込んだ。ぐっすり眠り体調も戻ったところで，翌日，いつか通り過ぎてしまっていた双六岳と三俣蓮華岳の頂上に寄り道し，黒部五郎のテン場へ着いた。カールの底部にある綺麗な所である。ここから頂上へは二手に分かれるが，もちろん人気のカール側の道は避け，人の少ない稜線コースを辿った。急な岩場を抜けた黒部五郎の頂上ではこの放浪で初めて霧に視界を遮られたが，真っ白な中で何も考えずに小一時間を過ごした。黒部五郎から薬師岳の登り口である太郎平までは，長い長い，のびやかな縦走路である（図３)。こんな良い所をせかせか歩いてはもったいないと，意識してゆっくりと歩を進めた。そのため太郎平につく前に日が落ち，真っ暗な中をLEDライトを灯して1時間ほど歩いたが，52歳の放浪としては上々と自分で納得した。

翌日はまた晴天の中，心静かに薬師岳へと向かった。中学生の時に学校行事で八甲田山に登ってから38年，この薬師岳が日本百名山の100番目であった。100番目にしたかったので，憧れの薬師岳をこの日まで待ったのである。眼下に広がる北アルプスの山々を眺め，あそこも登った，ここも登った，そして今度はあの辺りを彷徨いたい，と思いを巡らせた。薬師岳の頂上には薬師如来を祀る祠がある。持参していたお酒をあげ，これまでの無事を感謝した。「祝百名山完登」と書いた紙を広げ，そばにいた方に記念写真を取ってもらった。やはり百名山完登は嬉しかった。

薬師岳の頂上から遠く立山の方を眺めると，五色が原の広々とした緑が心にかかった。その向こうには立山と剣岳をはっきりと望むことができた。いつか立山からあの五色が原を「デイヴィッド」のように彷徨い，この薬師岳まで辿ってみよう，そう思いつつ，この放浪癖がいつまで続くのかと自分なりに覚悟を決めていた。

図１．立山から見た薬師岳方面。中央の平坦な部分が五色が原，その右奥の白い峰が薬師岳。

図３．黒部五郎岳から太郎平へ向かう長い，のびやかな縦走路。

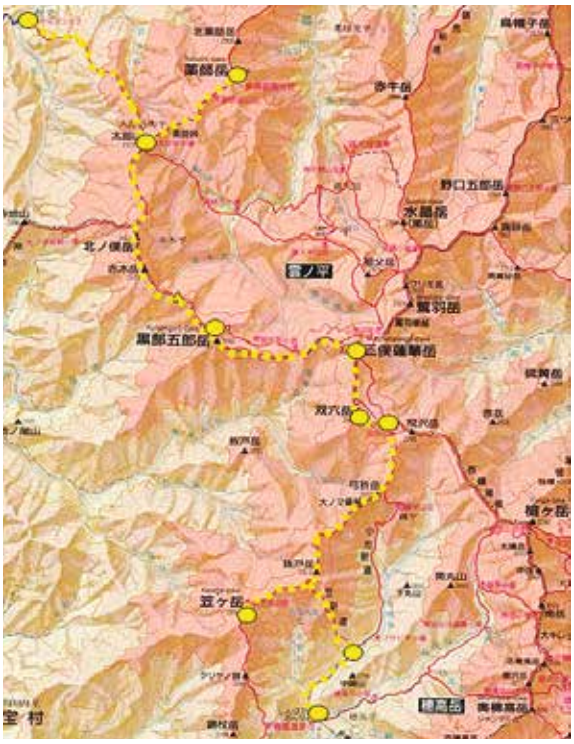

図２．足跡（黄色の点線）。新穂高温泉（下中央の丸印）から入山し，笠，双六，三俣蓮華，黒部五郎，薬師岳と辿り，富山県の折立（上左の丸印）へ下山した。

新任教員紹介

大　高　麻衣子

保健学専攻　母子看護学講座　小児看護学分野

2011年10月に母子看護学講座に着任致しました。学生の皆さんのみずみずしい感性を大切にしながら、ともに看護について考え、深めていきたいと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

藤　田　智　恵

保健学専攻　地域・老年看護学講座　地域看護学分野

2011年10月に着任致しました。教員として母校である本学に戻ってくることができたことを心よりうれしく思います。学生と共に学び、共に少しずつ成長してまいりたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

平成23年度秋田大学医学部保健学科入学試験実施状況

専攻		募集人員										志願者数										受験者数									
		推薦Ⅱ		前期		後期		社会人		合計		推薦Ⅱ		前期		後期		社会人		合計		推薦Ⅱ		前期		後期		社会人		合計	
看護学	計	15		44		15		－		74		0		2		2		－		4		15		42		13		－		70	
	男	1		8		1		－		10		0		0		0		－		0		1		8		1		－		10	
	女		14		36		14		－		64		0		2		2		－		4		14		34		12		－		60
理学療法学	計	6		10		2		－		18		0		0		0		－		0		6		10		2		－		18	
	男	2		6		1		－		9		0		0		0		－		0		2		6		1		－		9	
	女		4		4		1		－		9		0		0		0		－		0		4		4		1		－		9
作業療法学	計	6		10		4		－		20		0		0		1		－		1		6		10		3		－		19	
	男	0		2		1		－		3		0		0		1		－		1		0		2		0		－		2	
	女		6		8		3		－		17		0		0		0		－		0		6		8		3		－		17
合計	計	27		64		21		－		112		0		2		3		－		5		27		62		18		－		107	
	男	3		16		3		－		22		0		0		1		－		1		3		16		2		－		21	
	女		24		48		18		－		90		0		2		2		－		4		24		46		16		－		86

専攻		合格者数										辞退者数										入学者数									
		推薦Ⅱ		前期		後期		社会人		合計		推薦Ⅱ		前期		後期		社会人		合計		推薦Ⅱ		前期		後期		社会人		合計	
看護学	計	16		43		16		－		75		0		3		2		－		5		16		40		14		－		70	
	男	1		10		1		－		12		0		1		0		－		1		1		9		1		－		11	
	女		15		33		15		－		63		0		2		2		－		4		15		31		13		－		59
理学療法学	計	6		10		4		－		20		0		1		0		－		1		6		9		4		－		19	
	男	3		10		2		－		15		0		1		0		－		1		3		9		2		－		14	
	女		3		0		2		－		5		0		0		0		－		0		3		0		2		－		5
作業療法学	計	6		11		3		－		20		0		0		0		－		0		6		11		3		－		20	
	男	1		3		0		－		4		0		0		0		－		0		1		3		0		－		4	
	女		5		8		3		－		16		0		0		0		－		0		5		8		3		－		16
合計	計	28		64		23		－		115		0		4		2		－		6		28		60		21		－		109	
	男	5		23		3		－		31		0		2		0		－		2		5		21		3		－		29	
	女		23		41		20		－		84		0		2		2		－		4		23		39		18		－		80

平成23年度日本学生支援機構奨学生数

区　　分	人　数
第一種奨学生（無利息）	101名
第二種奨学生（有利息）	141名

平成23年度卒業生進路状況

平成24年４月現在

専攻名	就職者数						進学者数						その他	合計
	県内		県外		計		県内		県外		計			
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
看護学専攻	11	32	3	33	14	65	0	1	0	0	0	1	2	80
理学療法学専攻	5	3	5	6	10	9	2	1	0	0	2	1	0	19
作業療法学専攻	5	6	3	5	8	11	2	1	0	0	2	1	0	19
計	21	41	11	44	32	85	4	3	0	0	4	3	2	118

理学療法学専攻及び作業療法学専攻の県内進学者は、就職進学者で就職者数にも含まれている。

平成23年度秋田大学医学部保健学科後援会　決算書

収　入　額　4,970,089円

支　出　額　3,668,608円

差引残額　1,301,481円（次年度へ繰越）

収入の部

項　　目	予算額	決算額	差引増減	摘　　要
前年度より繰越	769,655	769,655	0	
会　　費	4,480,000	4,200,000	△ 280,000	@40,000×100名 @20,000×10名
雑　収　入	1,000	434	△ 566	預金利息
計	5,250,655	4,970,089	△ 280,566	

支出の部

項　　目	予算額	決算額	差引増減	摘　　要
学部協力費	380,000	328,931	51,069	臨床実習指導者連絡協議会， 特別講演会等補助，教育賞（H23）
課外活動助成費	170,000	160,000	10,000	団体助成（8団体），学部長表彰
行事助成費	1,100,000	586,205	513,795	新入生オリエンテーション， 見学実習・解剖体火葬時バス代
施設見学謝礼	220,000	107,475	112,525	実習施設見学謝礼
会　議　費	150,000	99,516	50,484	総代会・理事会
広報活動費	300,000	249,500	50,500	後援会だより（No.21），送料
臨地臨床実習費	150,000	150,000	0	実習指導経費，車賃
国家試験対策経費	1,200,000	1,149,780	50,220	国家試験（模擬）受験料， 国家試験関係図書
卒業祝賀会経費	800,000	757,780	42,220	卒業祝賀会，卒業記念品， 卒業記念集合写真
雑　　費	50,000	7,801	42,199	ハガキ代，切手代
予　備　費	730,655	71,620	659,035	振込手数料，送料，弁当代
計	5,250,655	3,668,608	1,582,047	

平成24年度秋田大学医学部保健学科後援会　予算書

収　入　額　5,501,981円

支　出　額　5,501,981円

差引残額　0円

収入の部

項　目	前年度予算額	本年度予算額	前年度比	摘　要
前年度より繰越	769,655	1,301,481	531,826	
会　費	4,480,000	4,200,000	△ 280,000	@40,000×100名 @20,000×10名
雑　収　入	1,000	500	△ 500	預金利息
計	5,250,655	5,501,981	251,326	

支出の部

項　目	前年度予算額	本年度予算額	前年度比	摘　要
学部協力費	380,000	380,000	0	臨床実習指導者連絡協議会， 特別講演会等補助，教育賞
課外活動助成費	170,000	200,000	30,000	団体助成（8団体），学部長表彰
行事助成費	1,100,000	800,000	△ 300,000	新入生オリエンテーション， 見学実習・解剖体火葬時バス代
施設見学謝礼	220,000	220,000	0	実習施設見学謝礼
会　議　費	150,000	150,000	0	総代会・理事会
広報活動費	300,000	300,000	0	後援会だより（No.22），送料
臨地臨床実習費	150,000	150,000	0	実習指導経費，車賃
国家試験対策経費	1,200,000	1,500,000	300,000	国家試験（模擬）受験料， 国家試験関係図書
卒業祝賀会経費	800,000	800,000	0	卒業祝賀会，卒業記念品， 卒業記念集合写真
雑　費	50,000	50,000	0	電報料，ハガキ代，切手代
予　備　費	730,655	951,981	221,326	振込手数料，送料他
計	5,250,655	5,501,981	251,326	

平成24年度秋田大学医学部保健学科後援会役員・総代名簿

役職名		氏名	学生	
			専攻	氏名
会長		中道博之	看護	望
副会長		渡辺文孝	看護	泰代
〃		丹羽誠	作業療法	歩
理事		髙橋明道	看護	道子
〃		久保田政昭	作業療法	遙
〃		小泉典彦	看護	恵里子
〃		伊藤和男	作業療法	愛依
監事		大倉陽子	理学療法	和貴
〃		熊谷明	理学療法	萌生
総代	4年次	(髙橋明道)		
	〃	(中道博之)		
	〃	(大倉陽子)		
	〃	(久保田政昭)		
	3年次	(小泉典彦)		
	〃	(渡辺文孝)		
	〃	小田嶋剛	理学療法	鷹哉
	〃	(伊藤和男)		
	2年次	佐藤透	看護	麻衣子
	〃	田口暁	看護	瑞季
	〃	(熊谷明)		
	〃	(丹羽誠)		
	1年次	福士直人	看護	早織
	〃	福田芳晴	看護	結
	〃	新出康史	理学療法	卓斗
	〃	諏訪崇	作業療法	恵利香

○顧問

氏名	役職名
大友和夫	保健学科長・教授
平元泉	看護学専攻主任･教授
進藤伸一	理学療法学専攻主任･教授
石川隆志	作業療法学専攻主任･教授

大学の行事等（平成23年４月～平成24年３月）

23	４．１（金）	学年開始，前期開始，４年次定期健康診断
	４．４（月）	２・３年次定期健康診断
	４．４（月）	２年次以上ガイダンス
	４．５（火）	平成23年度入学式（秋田県民会館）は東日本大震災により中止
	４．６（水）	２年次以上前期授業開始
	４．12（火）	新入学生ガイダンス
	４．13（水）	１年次前期授業開始
	４．19（火）	学生定期健康診断（新入学生）
	６．１（水）	秋田大学創立記念日（授業日）
	８．11（木）	夏季休業開始（９月30日まで）
	８．７（日）	秋田大学オープンキャンパス
	８．27（土）	３年次編入学試験
	９．22（木）	３年次編入学試験合格者発表
	９．30（金）	大学院医学系研究科保健学専攻（博士前期・後期課程）入学試験
	９．30（金）	前期終了
	10．１（土）	後期開始
	10．12（水）	大学院医学系研究科保健学専攻（博士前期・後期課程）入学試験合格者発表
	12．26（月）	冬季休業開始（１月８日まで）
	12．28（水）	仕事納め
24	１．４（水）	仕事始め
	１．14（土）	大学入試センター試験（15日まで）
	１．20（金）	入学試験（推薦入学Ⅱ）
	２．７（火）	入学試験合格者発表（推薦入学Ⅱ）
	２．16（木）	助産師国家試験
	２．17（金）	保健師国家試験
	２．19（日）	看護師国家試験
	２．22（水）	春季休業開始（４月３日まで）
	２．25（土）	入学試験（前期日程）
	２．26（日）	理学・作業療法士国家試験
	３．６（火）	入学試験合格者発表（前期日程）
	３．12（月）	入学試験（後期日程）
	３．22（木）	入学試験合格者発表（後期日程）
	３．23（金）	平成23年度卒業式（秋田県民会館）
	３．24（土）	後援会総代会・理事会
	３．26（月）	保健師・助産師・看護師国家試験合格者発表
	３．30（金）	理学・作業療法士国家試験合格者発表
	３．31（土）	後期終了，学年終了

秋田大学医学部保健学科後援会会則

（目的及び事務所）
第１条　本会は秋田大学医学部保健学科（以下「保健学科」という。）の教育活動に協力・援　助することを目的とし，事務所を本学部内に置く。
（会　員）
第２条　本会は，保健学科に在学する学生の父母をもって組織する。
（事　業）
第３条　本会の目的を達成するために次の事業を行う。
一　保健学科整備に伴う諸事業の援助・後援
二　学生の教育活動の援助・後援
三　保健学科と家庭との連絡
四　その他本会の目的を達成するために必要な事業
（役　員）
第４条　本会に次の役員を置く。
一　会　長　１名　　会を代表し，会務を総括する。
二　副会長　２名　　会長を補佐し，会長不在のときその職務を代行する。
三　理　事　４名　　理事会を構成し，事業の執行，運営に当たる。
四　監　事　２名　　会計を監査する。
第５条　役員は総代会で選出し，任期は１年とする。
（総代会）
第６条　本会に総会に代わる組織として総代会を設ける。総代の選出は次のとおりとする。
一　総定員　16名（各学年４名ずつとする。）
二　総代は役員を兼ねることができる。
第７条　総代会は毎年１回開催し，次の事項を審議する。
一　予算の議決
二　決算の承認
三　事業の報告
四　役員の選出
五　その他必要事項
なお，必要に応じ臨時総代会及び総会を開催することがある。
（理事会）
第８条　本会の事業執行機関として理事会を置く。理事会は会長，副会長及び理事をもって構　成し，総代会の議決事項の執行並びに会の運営に当たる。
（会の招集）
第９条　総代会（総会を含む。）及び理事会は会長がこれを招集し,その議長となる。会議は　原則として出席会員をもってこれを開き，その過半数をもって議決する。ただし，必要やむ　を得ない事情のときは文書等によって意見を聴し，会議に代えることがある。
（顧　問）
第10条　本会に顧問を置き，保健学科長及び各専攻主任をもって充てる。
（職　員）
第11条　本会に次の職員を置く。
書記若干名　書記は総代会の承認を経て会長が委嘱し，庶務会計の事務に当たる。
（会　費）
第12条　本会の会費は，40,000円（３年次編入学生は20,000円）とし，原則として入会時に納入するものとする。納入した会費は返還しない。
（会計年度）
第13条　本会の会計年度は毎年４月に始まり翌年３月31日に終わる。
（補　則）
第14条　本会則の変更は総代会の議決によらなければならない。
附　　則
１　この会則は平成２年４月12日から施行する。
２　第６条の規定にかかわらず，総代の数は，平成２年度は４名，平成３年度は８名とする。
附　　則
１　この会則は平成14年12月20日から施行する。
２　第６条の規定にかかわらず，総代の数は，平成17年度までは12名とする。
附　　則
この会則は平成17年２月１日から施行する。
附　　則
この会則は平成22年４月１日から施行する。

後援会だより　通巻22号　2012. 4

発行　秋田市本道一丁目１の１
秋田大学医学部保健学科
後援会
☎（018）884－6543